

医師「無理解が追い詰める」

県内患者200人対策進まず

化学物質過敏症（CS）は全国で増えており、「13人に1人」が発症し得るとの研究結果もある。県内では約200人が診断を受けているが、専用の入院施設はなく、公共の場で目立つた対応は取られていないのが実情だ。

「CSは、空気中に漂う

微量の化学物質が肺や鼻の粘膜から吸収され、脳の中

枢神経系に影響を及ぼし発症すると考えられている」

2000年に四国で唯一

の専門外来を設けた高知市

の国立病院機構高知病院で診察に当たる、小倉英郎医師（77）＝四万十町の大西病院院長＝が解説する。

09年に病名登録され、高知病院は県外を含め400人以上を診断した。生活歴を聞く問診に数時間かかるため、現在、初診は3カ月待

ての状態という。

反応する物は多岐にわた

る。せき、頭痛、呼吸困難など症状もしかり。小倉医

師が強調する。「一番大変なのは、周囲の理解が得られ

ないこと。同じ空間にいて

も本人以外は何も感じないから。精神疾患じやないのに、周りの無理解が結果的に心を追い詰める」

CS患者の約4割が、電磁波過敏症を併発する。メカニズムは不明だが、Wi-Fiなどの通信環境が整

う中、増えている可能性がある」という。

化学物質による健康被害

は「香害」とも呼ばれ、海

外では公共施設への香料持

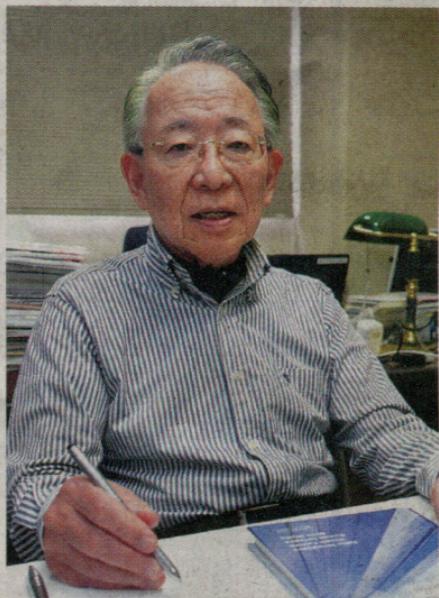
ち込みを禁止する地域もあ

る。国内でも、学校の給食着を着回さず個人所有にす

る▽庁舎のハンドソープを無添加のせっけん洗剤に替える」といった動きが出ている。

県は15年度、市町村や保健所の職員向けにCSの研修会を初めて実施。20年から啓発チラシを作り、サイトでも公表している。

一部学校では、症状のある生徒のため別室やオンラインで授業したり、教師が



「家族や周りの人の理解が一番大切」と話す小倉英郎医師
(四万十町古市町の大西病院)